全體性と感情

佐藤幸治

一

形態心理學が其の全體性の主張の根據を先づ專ら知覺の領域に於ける實驗に置いたといふことは確かに賢明な順序があつたと思ふ。併し心理學の問題が知覺に限られざる以上早晩情意方面の研究が其の立場に於ても企てられねばならぬことは明白であらう。現にコフカは其の「心理學」(2)に於て此の方面の素描を試み、レヴィンも其の「行動及び情緒心理學的研究」(13)其の他に於て感情研究の方法に關し敎へるところの多い暗示を與へてゐる。併し形態心理學に於ける此の方面の研究は其の獨自の立場を持つとしても、なほ著しく未開拓であることを否定することは出來ない。感情の實驗的研究には多くの困難を伴ふため、他の學派に於ても未だ說き得て我々をして戚々焉たらしめるが如きものは殆ど無いと云つても過言ではない。併し中にフェリクス・クリューゲルの感情說の如きは比較的之に近いものと云ふこ

とが出來るであらう。クリューゲルを繞るライプチヒ學派はヴェルトハイメル、ゲーレル、コフカを中心とするベルリン學派ほど華々しくはなかつたが、夙にこれと並んで現代心理學に於ける全體性高調の機運を釀成する上に少からぬ努力をなし來つたものである。クリューゲルはベルリン學派の主なる缺陷として經驗に於ける感情的なものと素質的心的構造との閑却と發生的見地の缺除の三つを擧げてゐる。(U.S.101) これが如何程迄現在の形態心理學に妥當するかは確に問題であらうが、併しこれに依つてクリューゲルの立場の重心は覗ふことが出來ると思ふ。クリューゲルの興味は極めて多岐であり其の說くところ又晦澁なものも少くはない。今私のなさんとするのはクリューゲルの全學說の叙述ではなく全體心理學に立つ感情說の一つとして、クリューゲルのそれを採り、其の發展を顧み、其の梗概を叙し、終りに之に對する二三の疑點を擧げることである。

二

クリューゲルの感情說は如何に發展したか。クリューゲルの感情說に於ける中心概念の一つは總體經驗の複合質 (Komplexqualität des Gesamterlebnisses) としての感情の概念である。具體的な複雜な經驗を出來るだけ少數の簡單な要素に分解し、其

の結合によつて複雜な經驗を構成しようとする原子論的な見方に對して種々の方面から批難並びに補正が試みられたのであつたが、其の一つとして形態質說を擧げることが出來る。マッハが先づ空間的形態や旋律等が簡單な感覺と等しき直接性を以て與へられることを認め、次いでフォン・エーレンフェルスが此等のものは其の構成要素の單なる和以上の特質を有することゝ其れが直接的に要素と相並んでではあつたが、與へられる事實を考察し、此の圓四角等の空間的形態、旋律等の時間的形態の全體として附加される積極的表象內容を形態質（Gestaltqualität）と名付けたのである。彼は更に形態質の間に成立する類似差異等の關係、旋律の複合等を高次の形態質と見做した。併し彼は之を感情の領域迄擴大しようとは考へなかつた。知覺方面で先づさうであつたやうに、感情方面に於ても原子論は廣く之を風靡しゾントでさへも感情に於ける全體性、統一性の優位を認めようとしながら最後迄之を脫することが出來なかつたのである。感覺と感情との間に二つの極としての對立がある。感覺方面に於て見出された原理には之を直ちに感情方面に轉用することの出來ぬものもあるであらう。併しハンス・コルネリウスが旋律或は空間形態について生ずる感情は其の基礎をなす感覺或は表象の單なる寄せ集めではなく、「其の複

合に於て始めて生ずる新しい內容であるといふ意味に於て其れ自身また一種の複合の形態質と見られる」(I. S. 117) と考へ形態質の概念を感情迄擴げたことは、なほ一段の發展を約束したものと見ることが出來る。クリューゲルは此の思想を受けて之を進めたのである。總體經驗の複合質としての感情の概念は知覺に於ける形態質概念の擴大に依るものであつたが、クリューゲルに其の思想の確證を與へた重要なものは彼の音響心理學的研究である (3. 4. 6)。勿論此等の研究に於て感情に附隨的に取扱はれてゐるに過ぎないが、此等を辿ることに依つて一應彼の見方を覗ふことが出來ると思ふ。彼の「Zweiklang の觀察」(3) に於ては感情を帶びた複合が分析されるときは感情の印象が攪されること、實驗の時間を重ね、分析に習熟するに從ひ印象に對し著しく無記的になつたことを注意したに止るが、次の研究「差音と協和」(4) に於ては更に進んで協和、不協和の經驗に於て感情と感覺的特徵とを區別するとしても、直接的な經驗に於ては先づ分析されぬ心的統一をなし經驗の兩側面は抽象的分析の產物に外ならぬこなと、ほ此等の聽覺的事實に依つて感情は意識の所謂「客觀的」內容の傍に特殊の內容として存するものでなく、更に特殊の心的「作用」とか心の振舞ひ方とか云ふものでは勿論なく總體意識內容の性質であると考へざるを得

なくなつたこと更に協和、不協和の感情をも屢〻云はれるがむしろこれは快適又は不快適と呼びなされてゐた總體意識內容の性質に限定した方が一義的になることを述べてゐる。卽ち此處に於ては感情は心的作用の如きものではなく心的內容の性質であるといふことゝ共に總體意識內容であることを主張したのである。「協和の學說」(6)に於ては感情說に於ける特別の進展は見ることは出來ぬが彼の心理學的立場が其の論敵リップス及びシュトンプの批評に明瞭に描き出されてゐる。彼は直接的な所與、經驗が複合的性質のものであり心理學の課題は凡ての經驗科學と等しく複合的なものを單純なものに還元するにあるなどと云ふ點に於て未だ十分に舊套を脫し得ぬものが見出されるが併し心理學的概念の實體化を排し、リップスに於ては複雜な經驗に對し實在的な常に同樣である「基礎」を考へ、云はば心理的現實を物的に二重化してゐることを指摘し、又シュトンプに於ても氣附かれぬ感覺や音融合の概念に於て明かに此の物化が認められること卽ち後者の如きは一方明かに現象的基礎を有する直接的に經驗された音複合の比較的統一性を意味すると共に他方多くの場合に於て唯客觀的に物的に實體化された事實卽ち分析の種々の度の困難さを意味し其の際物理的刺戟に對應して常に同一性質を保つ二つの異る感覺

の種々の度を有する重なり合ひが存するに過ぎないと見る口吻の存することを難じ心理學は先づ直接的に與へられた具體的な總體經驗から出發しなければならぬ、心的經驗の全體的な還元せられざる內容が心理學の對象であり其の完全な先入見を容れない分析が其の課題であると主張してゐる。感情については、シュトンプが音色、純粹さなどを感情視し、リップスが統一の感情、協和の感情等を說くに對し之を感情概念の不當の擴張と考へかくの如きものは潑溂たる感情を伴ふことはあるが、併し其れ自身は微細な段階を持つた複合質の知覺に過ぎず、凡ての複合的知覺と等しく現在存在するものと多數の以前の經驗との同化的結合を示すものであると見、從つて其の研究中に於て感情として取扱つてゐるものは快適、不快適の兩者に限られてゐるのである。

「協和の學說」を發表した頃カール・シュトンプが所謂感性的感情について其れが感情であると主張される根據卽ち情意運動との近似主觀性、空間性の缺除等いづれも保持し得ぬものなることを論證して之を感情感覺と呼んだのに對し、クリューゲルは其の複合質說を述べ之を辯護してゐる。(51) 卽ち其時の總體意識內容の凡ての複合的部分が其れ自身として其の部分の凡ての性質を越えて特殊の性質を有するや

うに凡ての總體意識內容其れ自身として特殊の性質或は全體的色合が現れ、總體意識內容の此の總體的な色合此の絕えず變る複合質が感情なのである。感情は總體意識內容の如何なる部分にも單獨に恒常的に結合してゐるものではなく、凡てに依つて卽ち其の特殊の性質、其の集合其の部分的複合質等に依つても規定せられ、從つて總體意識內容中の如何なる變化に依つても變化し、對立せる感情質にも轉化し、又極限的な場合として無記になることもあるのである。シュトンプの說に對して此の說は感情と部分的複合の性質を理論的に關聯せしめ得る點に長所があるとクリューガーは主張する。卽ち部分的複合も其の個々の內容の性質よりは比較的恒常的に或る感情と結合して居り、一つの部分複合が包括的になり强くなり、限定も定位も漠然となり分析せられることも少くなると共に其の特殊的な複合の色合ひが益〻感情に近づいて來るのである。美的經驗、眞の感情などに其の例を見ることが出來る。又シュトンプが高級感情や情意運動と單純感情との間に設けた溝渠はこれに依つて橋渡される、卽ち部分的複合の繼起に卽ち例へば音樂に特殊の複合質を見なければならぬやうに情意運動は繼時的複合の特殊の總體性質と見ることが出來る。更にジェームズ・ランゲが一面的に誇張した凡ての種類の有機感覺が感情に干

與すると云ふことも之と無理なしに一致することが出來る。卽ち此の論議に於ては總體意識內容と部分複合との相互關係、情意運動の複合質的理解等の點に於て發展せしめられ、彼の感情說の複合質的側面が一通りの纏りを持つに至つたことを見出すのである。

クリューゲルの感情說の他の中心概念は感情の深さ（Tiefe）の概念である。彼は其の「道德哲學の基本概念としての絕對的價値者の概念」（Der Begriff des absolut Wertvollen als Grundbegriff der Moralphilosophie. 1898）に於てカントの形式主義とフォン・エーレンフェルス等の幸福主義に反對しつゝ眞の價値體驗を感情の深さに認めんとした（14. S. 32）のであるが此の深さの思想が明確に述べられたものはフォルケルト七十歲記念論文集に寄せた「態情生活の深さの次元及び對立性」（8）に於てである。此の感情の深さの概念に於て彼の感情說も著しく具體的な感情に近づいて來る。卽ち冒頭に從來の感情心理學に說明せらるべきものを十分精確に記述することなしに說明せんとしたことを難じ記述心理學の立場に於て感感性質の種類を先づ問題とし、經驗を忠實に省るならば感情經驗は全體として無限に多樣の色彩を有するものであつて、複雜なる感情經驗を構成する要素として從來考へられた快不快の二

つ若しくはヴントの感情の三方向の如きものは結局感情の經驗的種類概念であるに過ぎぬと見、感情の非感情的なものより區別せらるべき特徴として其れが其の際の全意識內容の特殊の複合質であることの他に內面的な暖さ(innere Wärme)と意識を一杯に充たす幅(bewusstseinserfüllende Breite)を持つことを擧げ、かゝる一般的な性質其の他特殊的な諸性質も感性的に制約されたものに於けるよりも大抵眞の情意運動の純粹に精神的な現象に於て一層明かに現れるものであると考へる點等に於て其の傾向を認めることが出來る。感情の深さの概念も之に伴つて生れるものである。感情の質的差異として價値的に高級感情と低級感情とを別つこともあるが、かゝる規範的見地を離れて心理學的に見るとき感情の深さ又は內面性(Innigkeit)が重要な意味を持つものとなる。卽ち不快な身體的苦痛、渴の一時的な苦惱、飽滿の滿足、浮々した氣持、瞬間的な緊張や憤懣の如き諸感情と、友情とか、子供に對する配慮とか、敬虔とか良心の苛責とか又は藝術作品に對する沈潛等の諸感情を比較するならば其の間には「深さ」とか「內面性」とか呼ばるべきものゝ對立がある。此の感情の深さとは發達しつゝある全人格の中に其の根を有するものであり我々の感情は我々が其の中に我々自身に對する「眞實」又は「不眞實」(„Treue" oder „untreue")を直接に經驗する

ことが多ければ多い程、又我々の心の中核をなす本來の價値構造に依つて規定されることが多ければ多い程深く、內面的になるのである。我々の感情が最も深い根柢から動くとき我々の本質の素質的分節とも云ふべきものが直接に意識に現れるのであり、これと共に我々は心的なるものゝ一般的成長傾向を形造る、持續的なものを創造する力、又精神の普遍妥當的要求とを感ずるのである。此の感情の深さを明確に區別しなければならぬのは感情の强さである。例へば性的快感は快や興奮に於ては極度に達することが出來、身體的苦痛は不快の最高度まで到り得るが深さに於ては眞の藝術の凡ての印象、漸く氣注かれる良心のとがめ等に及ばないのである。感情の深さは其の對立性と密接な關係を有する。淺い感情狀態は常に一樣の方向を持つてゐる、例へば瞬間的な氣の浮き沈みや、連絡のない低い音の沈靜の働きや賭事の疎大を緊張や弛緩などは其の內に對立性を藏してゐない。之に反し凡ての深い感情は完全にまとまつたものとして感ぜられるがなほ其の中に多くの方向を有し其の間に緊張した對立を含むのである。凡ての深い幸福は其の杯の中に一滴の苦味を潛め、或は其のかげに苦惱の豫感を有し暫濠に生命を委ねる戰士に於ては最も單純なたとへ「感性的」な感情であつても、それが對立的に死に關係せしめられるこ

とに依つて其の深さを增すのである。吉き報せもそれが總體經驗と同時に統一的に織り交せられ、なほ眞摯な心配がそれを包むとき、遙かに深く沈靜的に働くのである。此の深さ感情に於ける對立性は反對の感情質の單なる繼起とに嚴密に區別しなければならぬ。幼兒は動物と等しく瞬間に依つて規定されるため苦の情意は反對者を綜合的に結合することが出來ない。有頂天になつて騷いでゐた子供が何事かで急に泣き出すとき此等の兩感情は其れによつて、對比によつて强められることはあつても深さに於て少しも深められることはないのである。眞の深さは內的必然性を以て眞摯な嚴格な對立を感情に於て同時に全體的に包括し互に關係せしめる發達せる又發達しつゝある情意を必要とするのである。此の兩極性は高貴なる性格に於て又藝術、哲學、宗敎の如き深き價値體驗に於て最もよく現れるのである。此の感情の對立性を精確に叙述し情意生活の事實を其の法則的必然性に於て認知するためには先づ歷史的比較の方法を用ゐねばならぬが組織的な設問及び分析其の他條件の實驗的研究も除外さるべきではない。實驗法は殊に感情の鈍麻の研究に設立つものである。感情の對立は此の鈍麻を防ぐ。感情が深ければ深い程其れに鈍麻の機制に對し一層强く同時に豐富な姿を以つて抵抗するのである。クリュ

ーゲルは更に我々の經驗の深さと其の對立性との間の作用關聯は情意的なものから更に精神現象の凡ての領域に擴つてゐるやうに思はれると附加へてゐる。此の感情の深さの思想に先に擧げた複合質的な見方と交叉する重要な契機の存することは右に依つて略〻明かであると思ふ。

彼は其の後「心理學に於ける構造の概念」(10)に於て從來或は現象的な形態に(ゲーレル)、或は純粹心理學的にではなく、文化や人格の規範的理念や半ば浪漫的半ば現實的な理想に滲透されたものに(ディルタイ)或は何等か精神的な作用の何等かの內容に對する抽象的關係に(フッセル)極めて多義的に使用されてゐた構造の概念を全く條件的に分節を持ちそれ自身の爲比較的纏りを持つた素質的全體(ein gegliedertes und in sich relativ geschlossenes dispositionelles Ganzes)に限定し、凡ての部分構造は精神物理的總體構造と素質的關聯に於て存すると考へた。此の心の構造的な部分と全體との相互制約は情意の領域に於て最も良く現れる。其の動きは價値傾向(Wertungen)と名付けられる我々の感情及び意志の素質に依存するものであつて、此の價値づけの傾向は本能的な基礎を持ち、人格とか性格とか呼ばれるものゝ核心を爲すのである。現象的に見るならば此の心的構造は通常我々の經驗の質的色彩に直接に

反映し特に感情の深さ又は内面性は情意の最も内面的な個性的構造を最もよく表現するものである。卽ち此處に於てクリューゲルの感情の深さは其の條件的基礎を與へられるのである。

クリューゲルの感情說に於て中心概念をなすものは右の二つであるが、クリューゲルの心理學體系としては其の「發達心理學序論」(一)等に於て提唱せられ、ハンス・フォルケルト等の研究に其の業蹟を示してゐる發達心理學的—個體的並びに社會的關聯に於ける—見地の顧慮を必要とする。而して發達的に原始的な經驗は著しく感情的なものであることを考へるならば此の見地も、感情の考察と全く無關係なものはなくなるのである。かくて經驗全體、構造、發達等の諸概念を中核として其の心理學的立場を闡明せんとしたのが彼の「新心理學研究」第一卷の序論として述べた「心的全體性に就いて」(二)の論文である。彼に依れば心理學の第一の課題は經驗の忠實なる記述である。經驗は凡ての場合に於て全體的なものであり心的事象の經過に於て以前に經驗された全體より持續的に發展し出づるものである。其等のうち分節せるものは比較的分節せざるものを先行者として豫想する。又現在經驗の一部分にそれが同時に與へられたものを包括し、其の中の分節が少くなり更に他の

部分よりの浮出しが淺くなるにつれて其れは感情的なものとなる。感情は總體的な其の時與へられた全體の性質である。同時に與へられる凡ての部分複合、形態等の部分全體は例外なしに其の時の總體全體卽ち感情的なものに埋沒してゐるのである。此の埋沒の度は凡ての感情に共通な色合ひ卽ち其の暖さが經驗の部分を浸すことに依つて直接的に與へられるのである。右に對し心理學の第二の課題は心的現象に對し其の條件を明かにすることである。卽ち此處に構造の概念を必要とするに至るのである。構造は前述の如く分節せる素質的全體である。比較的持續的な方向、以前の經驗の後作用の如きものゝ組織である。此の部分構造例へば價値傾向や知識の如きものは他の部分構造と素質的關聯を持つて存在し、更に其れに素質的全體卽ち人格更に廣く之を擔ひ、互に規定し合つてゐる社會の中に埋沒されてゐるのである。心的構造は直接に與へられるものではなく、經驗的なものから推知されたものであるが經驗殊に感情の深さは其の最も優れた手がかりである。最後に心理學構成を擧げる。此處に於ても全體性は最高の原理である。心的構造を考察するとき既に其の中に其の發達が豫想される。直接所與の變轉は持續的に經驗全體から常に其の總體としての感情的全體性を保持しながら多樣の分節に依つて

ものである。心及び心が最初より屬してゐる社會の發達は素質的全體を基礎とし其の感情に規定された開展と連續的な變形とに依つて生ずるものである。凡ての生けるものは其の生れながらの構造を個體的にまた種族的に確保し發展せしめんとするのである。かくて心的全體性は先づ其の經驗の全體性に更に素質的な構造の全體性に、發達の全體性に展開されるのである。

此の思想を背景とし、ウィッテンバーグ・シンポジオンに寄稿を求められたのを機とし其の感情說を體系的に叙述することを試みたものが、其の「感情の本質」(12)である。其の中に述べられてゐることは今迄其の跡を辿り來つた思想の重復も多いが、なほ一段の分節發展を示したものとして節を改めて其の輪廓を描かうと思ふ。

三

感情の本質を何に見るかと云ふことに就いては或るものは主知的に或るものは感覺的に之を見感情質についても或るものは當分限定し得ぬほどの多樣性を持つと考へ、或るものは基本的な感情を快、不快の二つに限らうとする。此れと感情概念が一方客觀的關係に盡きぬ殆ど一切の經驗を含むほど廣汎に用ゐられゐると共に、狹義の感情についても絕えず其れが動搖し變轉し注意の指向に依り解消せんとす

る傾向を示す等の事情により其れ自身規定が極めて困難であり、又二つの感情を同時に經驗し得ないため直接比較が不可能であり、其の鈍麻性のために反復も實驗法として使用し得ず、適合刺戟の如きも感情に就いては存在しないと云ふ事情に基くものである。感情の問題は此等の困難を含む。併し科學は之を認識して適當な方法を結合して、之を一歩々々克服することを努めねばならぬ。クリューゲルは其の方法としてヴントの印象法、表出法、民族心理學的方法の他に動物又は兒童の心理學的比較の方法を重視する。然らば此等の方法を以て感情について如何なるものが規定されるか。

彼に依れば感情の特質は三つの方面から規定される。第一は叙述的に、第二は機能的關聯に於て第三は精神物理的構造と關係してである。機能的關聯は以前は表面に現れなかつたが此の論文に於て特に一方面として提起されたのである。

第一、經驗の全體性（Die Ganzheit des Erlebens）經驗の全體性は只知覺的な比較的分節し閉合せる全體即ち形態にのみ現れるものではなく、此等の部分全體を包括する總體全體についても認められねばならぬ。即ちこれが形態質の上位概念として遙かに包括的な複合質の概念を設定せる所以である。形態の概念は他の方面に於て

も注意を惹くに至つたが全く分別なく殆ど魔法の洋燈のやうに用ゐられ且主として知的方面に使はれたため凡ての眞の經驗の全體性を蔽ひ感情の世界に至る通路を閉ざす結果を將來したのである。忠實に觀察するならば正常の個人の經驗は大部分明瞭に限定されぬ茫漠たる極めて分化の進まぬ複合から成つて居り、之には凡ての器官の機能の組織が與つてゐるのである。少くとも發達せる人間及び高等動物に於て經驗的に與へられる全體は屢〻多數の比較的纏つた部分複合に分離してゐるといふことは重要なことであるが又自明のことではない。併し發達の最高段階に於ても、例へば永續的な甚だしい興奮、強い疲勞、一事に對する熱中等の如き場合にはさうでなくなるのである。且現實の經驗につき區別し得る「部分」又は側面は物の斷片の如きものとは全く異り常に相互の交渉を持ち又總體全體は埋沒し之に滲透され包込まれてゐるのである。此の總體全體の經驗性質が感情である。(Die Erlebnisqualitäten dieses Gesamtganzen sind das Gefühl) 此の總體全體はなほ必ずしも同時的なものであることを要しない。情緒其他の感情經過の如きも繼時的總體複合の性質として理解せられるのである。かゝる經驗性質は快、不快、興奮、緊張、弛緩等のものもあるがなほ全體經驗として更に多くの他の多樣なる色合ひ及び經過形式を持つて

ゐるので數を限定することも當分不可能なものである。

かゝる總體全體に對して、部分全體が對立し夫々其の複合質を有するが、かゝる複合質と總體全體の複合質卽ち感情との間には中間的な位置を持つものがあり、又客體のない陶醉的な又は全く氣分的な興奮の如き感情が次第に包括的な初めは分化の進まぬ部分複合に例へば何で興奮してゐるが何を望んでゐるか求めてゐるか恐れてゐるか等の意識に移り行き又逆の途をとることがあり此處に此の現象的な類似又は過渡を云ひあらはす爲め「感情樣」(gefühlsartig) なる概念を必要とするやうになるのである。卽ち其の複合が其時の總體全體の部分を包括すること多ければ多い程、其れが他の同時の經驗より浮出すことが不明瞭であればある程、又他の條件が等しければ其の內部に於ける分節が深くなければない程其の複合質は其れだけ感情樣になり其の反對の方向をとればまた其の反對になるのである。我々が祖的運動的狀況を經驗したり、樂音又は噪音の繼起を把握したり、我々の身體的狀態が意識に上つたり、あるものを探したり、見出さうとしたり、又あるものに向ひ或は態度を執つたりする約言すれば我々が心的に反應する其の仕方の最も自然的な最も多い發生的に最も早いものは此の如く複合質に規定された卽ち「感情的」(gefühlsmässig) なもの

である。

感情の現象的特質としてはなほ「意識を充たす幅」と「暖さ」とを擧げなければならぬ。之に關しても一方經驗の部分がその全範圍を全體的に充たし他方經驗者の關心を惹くことが多ければ多いほど感情樣になるのである。

併し本來の意味に於ける感情は凡ての他の經驗の種類と區別され又其れと關聯して、其時の總體全體或は經驗總體の複合質であると見られねばならぬ。

第二、機能的關聯 (Funktionszusammenhänge) 經驗の全體性と關聯して機能的に卽ち條件分析的に生きた事象を必然的なものとして把握することが必要である。第一から次の三つの特質が導き出される。而してこれは捉はれない綿密な觀察とも全く一致するものである。

一、感情の普遍性 (Die Universalität der Gefühle) 感情は經驗總體の複合質である。而して又分節の進まぬ茫漠たる經驗は感情樣の姿を呈する。故に其れには發生的に見て原始性を示すものが少くない。自然人や幼少の兒童や動物や素朴的な或は病的な人間に於ては敎養ある人間に於てよりもかゝる感情的な行動を遙かに普通に見出すのである。個人及び民族の文化が發達するにつれてかゝる分節せぬ未分化

の感情樣經驗は漸次減少する。併し文化人に於ても運動、競技や演劇、映畫其他種々の刺戟による陶醉狀態や群集的行動の場合にかゝる原始的經驗が心を蔽つて了ふことがある。併し他方感情は例へば音樂等の場合に長い間心を滿し、且感激を殘すなど又宗敎的な敎養のある人の敬虔の感情など明瞭に分化せる發達せる意識を持つ人々に於ても、其の狀態に於て其の微細な色合ひを增して行くものである。實驗的にも發生的に先行するものは感情樣の經驗であることは證明される。感情は他の凡ての經驗に對し其の背景であり母胎であり最も地味豐かな養土である。而して又經驗に於て何かゞ變化するならば常に感情も亦單獨で又他のものをも規定しながら變化する。心理學者として何者かを說明せんとするとき事實此の特殊の性質及び作用を閑却することは出來ない。此れが感情、之を擔ふもの、及び其の條件の「普遍性」と呼ばれるものである。此の感情の普遍性の原理から次の三樣の刺戟に對する精神物理學者達の考とは異つた關係が必然的に導き出される。第一に或る刺戟配置から直ちに或る特定の感情は云ふ迄もなく、兎に角目醒しい感情が惹起されるか否かを豫言することは出來ぬこと、第二に之に對し經驗全體が適當な性質を持つならば精神物理的事象の任意の變化が凡ての種類及び强さの感情を生ずる條件

となり得ると云ふこと、第三に現れた感情は其れと同時に經驗された凡てを色づけて了ふと云ふこと、それからが歸結されるのである。

二、感情の性質の豐富さ (Der Qualitätenreichtum der Gefühle) 組合せの計算に依つて考へても複合質の種類は終局の其れ以上分解出來ない經驗要素の種類よりも遙かに多いと云ふことは明かである。此の事は聽覺に於て特に明瞭に認めることが出來る。倒へば一定數の(今振動數及び振幅各々に於て六つとして見る)十分な差異を持つた物理的音刺戟が幾何の音感覺を生じ得るかを研究し(他の事情にして等しければ三十六以上には出ない筈である)之と此等の三十六の個々の感覺が二つ、三つ或はそれ以上が同時に又は繼時的に、共働するとき特殊的に與へられる感性的性質卽ち音色とか和弦とか、旋律とか韻律とかに於て經驗するものとを比較して見ればいゝ。かゝる音複合と同時に異質的なもの、非感性的なものも與へられる。かゝる組合せが多くなれば具體的經驗の色合ひは益〻多くなり其時の總體的經驗全體に就いては必然的にそれが最大となるわけである。比較的觀察に依つて得られた結果も之と一致する。一つの音知覺、一つの皮膚の痛覺、一つの視的形態經驗、一つの思想又は判斷の遂行は其の傍に或る他の種類の感覺、記憶等があると否とに拘らず本質的に

同一であることが出來る。之に反して同時に存在する感情はかの部分事象が相並んで經過し得るやうに他のものから獨立して存在することは有り得ない。感情は經驗の內容的總體的構造に於ける任意の變移に依つて影響される。卽ち此處に於ては「最小」の原因が最も多樣の而して凡ての心理學的意味に於て「最大」の結果を持つのである。

三、感情の變轉性及び無常性 (Die Wandelbarkeit und Labilität der Gefühle) 二つの音は第三の音が同時に鳴らされるとき著しく變化する、此れが二つの音に對し適合せぬ場合殊に著しく其れに屬する感情を變化する。又再認は其れと關聯して或る感覺や知覺や記憶が浮上り又變化するとき變化するを常とする。多樣の類似や方向や關係を持つた高い思考や意志の形態は更にさうである。感情は常に同時に又は經驗された近傍に於て見出される凡てに直接に關係してゐる。其感覺や靈感や奔放な想像等は凡て感情關係に依つて媒介されるのである。

體驗複合に就いて研究された辨別閾は其の構成部分に於けるものよりも著しく小であることを示してゐる。卽ち全體的な複合の變化は其の部分の變化よりも確實に認知せられ、正確に把握される。而して此の複合が包括的であり、分節されて居

り、同時に纏つて居れば居る程それは著しいのである。原始的意識に於ても凡ての特殊機能に依つてよりも纖細な感情性に依り一層明かに分化せる反應を示すのである。實驗室に於ても經驗の野に於ける何等かの部分の極めて小さい變化が何處と指定することの出來る以前に「感情的」に意識に現れるのである。

感情と機能的に規定せんとした此の三方向は互に極めて緊密な關聯を持つてゐるのである。卽ち感情の變轉性及び無常性及び其の迅速な鈍麻性等と寧ろ靜的な質の豐富さの動的半面である。兩者は更に感情の普遍性と必然的に結合してゐる。卽ち感情のみが凡ての經驗に於て缺くることがないといふこと、事象の著しい變化は先づ感情的に現れるといふこと、又最後に此等の感情的な動搖は極めて多樣の條件に基くといふ事實等と必然的な關聯を持つのである。

クリューゲルは右の三項に對し經驗全體の機能的關聯に於て現れる性質の、感情にも適用し得るものとして次の二項を加へる。

四、經驗全體に對する分析 (Analyse gegen Erlebnisganzheit)。經驗全體に對し分析的態度を以て望むとき其の全體的特質は失はれようとする。此のことは總體全體の經驗質である感情に於て殊に顯著である。全く傾到的な感情も理智的態度により著

しく損はれ、又其の反對者に轉化する。協和音等の實驗に於ても感情印象を叙述せんとするときは、各實驗の當初に於てなされなければならぬ。さうでなければ部分現象及び其の意識に於ける後作用が感情を不明にし强くし、攪亂するからである。調和とか分析とかのやうな部分複合の全體印象についても同樣のことが見られるのである。

五、全體の支配性 (Die Dominanz der Ganzen) 經驗の部分と全體とは互に緊密な機能的關聯に於て存する。卽ち經驗全體の或る部分の變化は總體性質の色合を變じ、特に先づ感情の變化に反映する。其れと共に一つの部分全體の性質又其時の總體全體從つて感情の色合ひが其れに屬する凡てに放射し多かれ少かれ其の全體の內部に於て區別せられ得べき凡てを滲透する。かゝる全體の中に埋もれてゐる部分は併し凡て等しい重みを持つものではなく、通常經驗全體の性質及び構造に對し大なる意味を持つ、卽ち最も全體に關係の多い部分が特別の重みを持ち支配的となるのである。例へば輪廓の如きものが之に屬する。一見全體の組織から離れたやうなものであつても總體全體と關係を持つことに依り大なる效果を示すことがある。これは茫漠とか混亂とか、不一致とかの感情樣の複合質を持つた、卽ち「輪廓」を閉し規

則性又に秩序を立て缺除せるものを補はんとする卽ち全體を纏つた全體として經驗せんとする一定方向の衝動を伴つた經驗なのである。此等のものが全體の支配性と更に全體への衝迫（Drang nach Ganzheit）として概括されるのである。

以上の部分複合に關する考察と總體全體の現れ方と機能とに關するものから感情の當然「注意される」ことは明かになる。其れは常に支配する。經驗複合の最も隔離せる部分であつても其時の感情に織り込まれ、融し込まれ全體的に之に包まれてゐるのである。感情は其の他の凡てを其の色で滲し反對するものを抑へ又は改鑄し結局其れ自身の韻律を以て之を一貫してしまふのである。其れは意識を全く充たし、凡ての心的事象に其の主方向を與へるのである。從來注意を惹く條件として擧げられてゐた感覺の强さとか習慣とか云はれるものも此の全體の支配性の原理の特殊的なものとして從屬し、其れに依り統一的に把握されるのである。

第三、持續形（Dauerformen）精神物理的構造（Die Psychophysische Struktur）。

感情を生と關係して考へるとき構造の概念を必要とするに至る。凡ての心的作用の中で感情的なものが生に對して最大の重みを持つのである。感情が全精神物理的狀態及び機能全體の產物であるやうに逆に充實した生の全體が解けることも

崩れることも無しに保持され常に新しく生産せられるのは特にまた此の感情に依るのである。更にまた無限に多様な影響の嵐の中に世界全體の中に生をうける此の小さな存在は少くとも數時間、長ければ數十年間其の生存を續ける、卽ち或る時間を通じてそれは精神物理的持續的組織として自己を主張するのである。此處から人間、恐らく又動物も、そして特に若いものが遊戯し、冒險し、場合によつては陶醉してまでも強い感情に滲された經驗を得ようとするといふことが新に理解される。併し此處にかゝる感情に於ても此の精神物理的組織の持續的なものに制約せられたものと其の淺い現在の配置にしか依らぬやうな瞬間的に規定されたものとを區別しなければならぬ。而して此の條件的な、分節を持ち持續性を有する素質的全體が構造と呼ばれるものである。

凡ての構造に規定された精神物理的事象は「深さ」の經驗に最もよく現れるのである。例へば先づ凡ての價値感情などに之を見ることが出來るであらう。併しまたとり止めもない思ひ付きとか、受賣りの判斷とかに對して「深い」基礎を持ち關聯のある思想が存在する。義務及び終局の責任感等からの意志決定も亦さうであらう。かゝる深さは生の全體の機能的關聯を症候的に否重要な現象に於て象徴的に表示

するものである。其のうちに凡ての生の表出を持續せるものとして內から統轄する構造的存在と、構造の發達段階と其の成長及び廢頽の必然性とを明かに反映するのである。之に對し價値及び價値構造に依つて規定せられず、人格の構造にも根ざさず、其の中心的な傾向及び持續形に特別の關聯を持たぬ經驗は淺い經驗である。

經驗特に感情の深さの標識として其の種々の鈍麻性と對立性とを擧げることが出來る。感情は種々の度に於て鈍麻性を有する。唯喧噪な瞬間的な人氣などゝ、健康な友情や藝術などの持續的な興奮とに區別される。文化に制約された經驗領域例へば藝術等に於ても祭り假裝、裝飾など一度は喝采を博しても、二度目には既に陳腐となる。併し眞の藝術の傑作などは繰返し眺められるごと新な美が發見される。此の鈍麻性は發達の段階に依つても異る、それで普通の文化人の成人であつたならば直ぐ飽き飽きするやうな同じ罪のない冗談を何回でも繰返して喜ぶのである。即ち此の研究には一方發生的並びに文化發生的比較及び分析が必要である。近頃の心理學が實驗に於て調整(Einstellung)を重視するに至つたのも經驗を制約する部分構造の顧慮として寧ろ當然のことでなければならぬ。此の感情の鈍麻性と關聯して感情の對立性が深い經驗を特徵づける。個人及び民族の凡ての深化、凡ての形

成は鬪爭と犧牲と放棄と持續的苦な惱とを通じて爲されるものである。其の反對者との對立に依つて深い感情は其の鈍麻を免れるのである。

感情の性質を規定するに用ゐた右の三面は心的全體性の理念によつて系統的に結合され、又根本的に結合せらるべきものである。卽ち逆に云へば心的全體性は第一には經驗の(特に感情的な)、第二には各方面の機能的關聯の、第三には其の組織的基底、心的最後には精神物理的構造のそれとして現れる。方法を嚴密にしても我々は、全體性從つて發達性の見方の缺除に陷つてはならない。實驗室に於て必要上分離されて研究される心的事象の部分聯關は現實に於て包括的な經驗統一に常に埋沒され、感情的と呼ばれる總體全體に最も强く捕へられ、條件的に制約されてゐるのである。之に應じて所々に把え得る心的部分構造は精神物理的有機體の構造的總體全體の中に、其の發達法則性の中に最後には文化の構造の中に編み込まれてゐるのである。而して此等のものは何等固定的なものではなく、交互作用に於て絕えず發展するものである。

四

以上述べ來つたところに依つてクリューゲルの感情說の發展及び現在の輪廓は略〻明にされたと思ふ。終に之に對する二三の疑問を附加へて置き度い。

クリューゲルの感情說の一中心概念である總體經驗の複合質としての感情に就いて考へて見る。感情經驗の原子論的見方に對して全體觀を徹底したことは一つの功績である。感情を快、不快等のみに限らず總體意識內容の複合質として規定するとき匂ひと色紙などを張つた主體の結合に對し「愉快な氣持、ヴィルヘルム・マイステルを思ひ出した」とか「全體が皺くちやの老嬢のやうなところを持つてゐる。聊か氣の毒に思つた」とか「日本の瀟洒な茶亭」とかの感情に關する報告を得ると共に記憶效果に於ける感情の影響としても常識に近いものを見出したと云ふ如きも（17, S. 529f u. a.）之に關して興味多いことである。併し此の思想が知覺的な形態質の概念の轉移並びに擴張であり、且それが音響心理學的研究に附いて先づ證得されたと云ふ事情は小野島敎授がライプチヒ學派の缺點として其の內容心理學的傾向の濃厚なことを擧げてゐるのに對して（15）直ちに不當と、排し去り得ざらしめるものを持つと思ふ。勿論之に對して第二の中心概念卽ち感情の「深さ」に一面補充を與へてゐることは明かである。此の概念は知覺の研究からではなく價値心理學的研究から

生じたものである。此處に於ては「暖さ」「意識を一杯に充す幅」等も感情の標識として擧げられる。此の二つの起源を持つた思想が直ちに一致することが出來るものであらうか。

種々の知覺的經驗の如きものを埋沒し滲透してゐる總體經驗の色合ひが感情の如きものであることは認めることが出來る。併し通常感情と呼ばれてゐるものは直ちに總體全體の經驗性質であると云ふことが出來るであらうか。經驗總體を蔽ふ快、不快、喜、悲等は明かに存在する。然らば親知の感情と稱せられるが如きものはどうであるか。全體經驗を蔽ふことはあつても、全く部分複合或は形態の性質の如く或は其れに對して生ずることがあるではないか。此の如きは狹義の感情ではなく「感情樣」の經驗或は單なる複合質であるとするならば、狹義の感情として一般に認められると思ふ「恐怖」をとらう。客體の知られぬ漠然たる恐怖の存在することは確「かである。これは聊かの無理もなく總體經驗の複合質と見ることが出來る。併しある人が恐ろしい顏をしてゐる」と云ふ時、强い急激な衝動を受けない場合に、其れが總體經驗の複合質であると云ふことが出來るであらうか。勿論其の際それが總體經驗の色合ひに浸されてゐることを認めねばならぬ。此處に感情そのものに於け

分節それと共に其の間の埋沒關係を考ふべきではないか。シュトンプが薔薇の花の快感を複合の性質と見ることが出來るか（5, S. 213）と云つたのも此の意味に解することが出來よう。又クリューゲル自身も感情が一部分より擴つて全體を浸すに到るを認めてゐるのである。

感情の本質としてはむしろ「暖さ」或は「關心性」の如きものが第一に來るものではないであらうか。前の「恐ろしい顏」の如きに於ても此の「關心性」は認めることが出來る。ヨハンネス・フォルケルトがクリューゲルとは聊か意味を異にするが「深さ」は感情の本質的一側面であるだけではなく、本質そのものであると云つたのも（16, S. 55）此れと規を一にするものと思ふ。フォルケルトが感情としては喜と悲から出發してゐるのもクリューゲルの出發點と對比して興味多いことである。

更にフォルケルトの感情說と比較してクリューゲル說に缺除を發見する概念は「自我」及び「表現」の概念である。フォルケルトに於ては感情は自我の狀態として理解せられ、其の身體的表現も顧慮される。クリューゲルに於ては單に經驗的なものに對して其の條件的關聯が顧慮されて來てゐる。これは內容心理學との批離を脫し得る一つの方向であるが、此處に於ても尙說かれるものは精神物理的構造或は有機

體であつて「自我」及び「表現」の世界の如き立體的な次元に進むことは出來ない。クリューゲルに云はせるならばかゝるものを考へるのは哲學的人間學の如きものであつて經驗の記述と其の條件分析を事とすべき心理學の領域を越えるものであると云ふかも知れぬが、苟くも感情の「本質」を說く場合此の世界迄背景を擴げることは必要であると思ふ。私は之に對してコフカの心理學方法論に多くの興味を抱くものである。卽ち彼は心理學は內部行動及び外部行動の學であり、方法としては行動の直接的理解 (Gebarens beobachtung) 內部觀察 (Erlebnis beobachtung) 及び外部觀察 (Vorgangs beobachtung) の三者を擧げる。此の直接的理解なるものは極めて規定の困難なものであるが併し他の二者に對して最も根源的なものとして重要な意味を持つものである。クリューゲルの心理學は心理學としても行動說の洗禮を受けてゐたいのではなからうか。全體性は他我との關係の次元まで擴げられねばならない。

クリューゲルは感情の對立に、兩者の間の緊張に其の深さの標識を見ようとするが、其處に深化の契機はあるとしても、寧ろ單なる對立、單なる緊張を越え、而して其等を統制するものに眞の深さは見出されるのではないであらうか。愛憎を越え愛憎

を驅使するものにこそ眞の深き愛はあるのではないか。

私はクリューゲルの感情說に對し此等の疑問を抱くものであるが、併し全體心理學の立場に於て感情を重視せる點經驗の部分全體のみならず總體全體を顧慮し此等と關聯して感情を規定せること感情の深さを問題とせる點等に於てなほ沒すべからざる功績があると思ふ。感情の問題には未だ多くの困難なるものが殘されてゐる。之に關してマックス・シェーレル等の情意生活の現象學的研究の如きも十分考慮せらるべきものを持つてゐる。心理學者は飽く迄其の骨折の多い小研究を棄てゝはならない、併し私はクリューゲルと共に、心理學者も其の骨折の多い小さな仕事を越えて妥當的價値の宇宙に目を擴げることも常に必要である」(11, S. 121)と思ふものである。(五・一一・一一)

文　献

1. Cornelius, H. Über „Gestaltqualitäten". Zeitschr. f. Psychol. Bd. 22. 1900, S. 101-121.
2. Koffka, K. Psychologie, Die Philosophie in ihren Einzelgebieten, hrsg. v. Dessoir, 1925, S. 495-603.
3. Krueger, F. Beobachtungen an Zweiklängen, Philos. Stud. Bd. 16. 1900, S. 307-379, S. 568-663.
4. —— Differenztöne und Konsonanz, Arch. f. d. ges. Psychol. Bd. 1. 1903, S. 205-275, Bd. 2. 1904, S. 1-80.

5. —— Diskussion mit Stumpf. Ber. ü. d. 2. Kongr. f. exp. Psychol. in Würzburg 1906, S. 211–213.

6. —— Die Theorie der Konsonanz. Psychol. Stud. Bd. 1. 1906, S. 305–387, Bd. 2. 1906, S. 205–255, Bd. 4. 1908, S. 201–282, Bd. 5. 1910, S. 294–411.

7. —— Über Entwicklungspsychologie. 1915.

8. —— Die Tiefendimension und die Gegensätzlichkeit des Gefühlslebens. Festschr. z. Joh. Volkelts 70. Geburtstag, 1918, S. 265–286.

9. —— Wilhelm Wundt als deutscher Denker. 1922, S. 1–44.

10. —— Strukturbegriff in der Psychologie, 1924.

11. —— Über Psychische Ganzheit. Neue Psychol. Stud. Bd. 1, 1926, S. 1–121.

12. —— Das Wesen der Gefühle. Entwurf einer systematischen Theorie. 1928.

13. Lewin, K. Untersuchungen zur Handlungs- und Affektenpsychologie. I. Vorbemerkungen über die seelischen Kräfte und Energien und über die Struktur der Seele, Psychol. Forsch. Bd. 7, 1926.

14. Odebrecht, R. Gefühle und Ganzheit, Der Ideengehalt der Psychologie Felix Kruegers. 1929.

15. 小野島右左雄. 最近心理學十二講 昭和五年

16. Volkelt, J. Versuch über Fühlen und Wollen. 1930.

17. Würdemann, W. Über die Bedeutung des Gefühls für das Behalten und Erinnern. Neue Psychol. Stud. Bd. 1. 1926, S. 507–572.